ひと協奏

西成を外国人客の街に

観光案内所作り簡宿に集客

日雇い労働者の街「あいりん地区」で知られる大阪市西成区が、訪日外国人の個人旅行客（バックパッカー）の一大拠点に変貌している。1泊2千円前後の簡易宿泊所（簡宿）が人気を集める。西成に新しい風を吹き込んだ一人が阪南大教授、松村嘉久（まつむら・よしひさ、49）だ。

十数ヵ国を放浪

「中にバックパッカーのカナダ人の友達がおるから」。松村は昨年11月、国際観光学を指導する講座のフィールドワークで学生約10人を連れ、簡宿「ホテル東洋」を訪れた。「宿代が安いだけやない。昭和の下町情緒が残る独特の雰囲気も魅力なんや」

松村も大学を休学し、十数カ国を放浪したバックパッカーだが、あいりん地区への関心を深めたきっかけは、大学院時代に取り組んだ路上生活者の実態調査。当時の専門は中国の少数民族問題だったが、ある教授の「社会的弱者という意味では路上生活者も同じ立場。調べてみないか」との言葉が後押しになった。

バックパッカーらと触れ合う松村嘉久さん（大阪市西成区）

調査を通じ旅館業や飲食業の多くが、経営の危機に直面している現状を知った。バブル崩壊や大阪経済の地盤沈下で、西成にかつて最大約3万人いた日雇い労働者は数千人になり、簡宿などの利用者も減った。「街には労働者に代わる新たな活力源が必要だ」。松村が目をつけたのがバックパッカーの存在だった。

2002年の日韓共催のサッカーワールドカップを好機と捉えた。しかし、周辺は過去に労働者らによる暴動も起きた場所。熱狂的ファンが騒ぎを起こしかねないという行政側の懸念は拭えず、「外国人客の呼び込み機運は盛り上がらなかった」。ぶち当たった壁の高さに悩みながらも松村は訴え続けた。「世界中のどの国でも、都会の真ん中には取り残された場所が必ずあり、安い宿を求めてバックパッカーが集まる」

次は食べ歩きで

粘り強い活動は05年から実を結び始める。松村の呼びかけに応じた若手の簡宿経営者らと「大阪国際ゲストハウス地域創出委員会」を結成。「バックパッカーは口コミで集まる」との経験に基づき、海外の口コミサイトに情報を掲載した。

だが、初めての経験に戸惑う経営者も多かった。「富士山に登りたい」「シルクロードはどこか」。外国人客の様々な問い合わせに十分対応できないという声が松村の耳に入った。「観光案内所をつくろう」。09年1月、簡宿の一画にバックパッカーからの相談を一手に引き受ける案内所を設置。松村ゼミの学生らが協力し、週末や長期休暇中に運営する。過去7年間でノート41冊分、約2万人の相談に応じた。

地道な取り組みの結果、西成区内の簡宿に宿泊する外国人客は急増した。集計に協力する8～9軒分だけで、04年の約9200人から、14年は約15万人弱に。未集計分も含めた推計では20万～25万人に上る。

次の課題は飲食業などの活性化だ。積み上げた相談内容から外国人客のニーズを分析。学生が付き添う「まち歩きツアー」を企画したほか、ガイドブックには載らない魅力を紹介する「食べ歩きマップ」も作成した。「もともと西成は様々な人々を受け入れてきた懐の深い街。集まった外国人客を通じて再生を果たしたい」。松村の目線は常に前を向いている。

（敬称略）

文　倉辺洋介
写真　尾城徹雄

日本経済新聞　平成28年1月10日